小松島市の方言

方言班（徳島県方言学会）

仙波　光明[1*]　　岸江　信介[2]　　峪口有香子[3]

要旨：小松島市内３地点で談話形式による聞き取り調査を行った。そこから得られた特徴的な方言形式について検討を加えた。従来気付かれてこなかったと思われる現象をいくらか取り上げることができた。

キーワード：うわて方言，サ行・ザ行子音，～ヘンダ，タッチェ

１．はじめに

今回の調査は，自然談話の収録を行い，そこに現れることばを分析した。談話資料に重点に置いたのは，できるだけ自然な形で小松島の方言の特徴を詳細に把握したかったためである。調査は2021年７月31日に和田島公民館，2021年10月に立江公民館，2022年５月に，北小松島公民館で実施し，話者は生え抜きで60歳以上の方々を対象とした。

２．方言区画上からみた小松島市方言の位置づけ

徳島県は四国の東部に位置し，近畿方言との共通性も強くうかがえる地域である。森（1982）の徳島県の方言区画によると，徳島県では，方言区画を〈上郡，下郡，うわて，灘（海部），山分〉の５区分にわけることができる。この区分からみると，小松島市は，「うわて」地域に属していることがわかる。

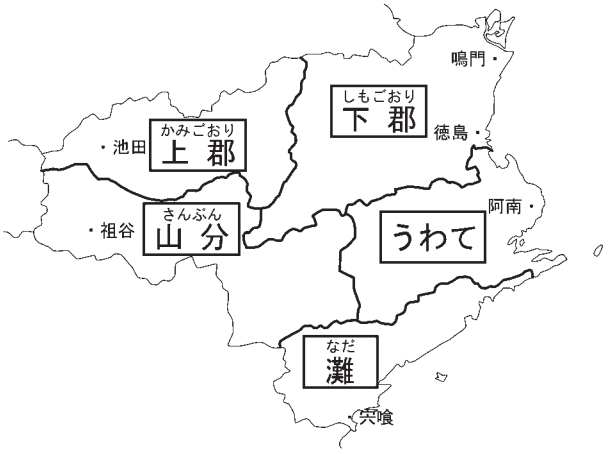

図１　徳島県における方言区画

３．音声・音韻の特徴

１）サ・ザ行子音の特色

「セ・ゼ」は高年層では口蓋化のある［ʃe］［dʒe］が，よく聞かれ，若年層では［se］［dze］で発音される。この口蓋化とは，音を発するときに，子音が調音点で調音されると同時に，前舌面が硬口蓋に向かって盛り上がって近づく現象のことをいう。日本語の口蓋化は特に「イ段［i］」の前で起きやすい特徴がある。具体的には，仮名の「キ」，「シ」，「チ」，「ニ」，「ヒ」，「ミ」，「リ」，「ギ」，「ジ」，「ヂ」，「ビ」，「ピ」，「キャ」「シュ」「チョ」の子音が口蓋化することが多いと言われている。今回の調査では，戦前のことをシェンジェン［ʃenʒen］，戦後のことを，シェンゴ［ʃengo］，全部のことを，ジェンブ［dʒenbu］と使用が認められた。

1　徳島大学名誉教授　　2　奈良大学文学部教授　　3　四国大学地域教育・連携センター講師
＊　〒771-1202　徳島県板野郡藍住町奥野字和田109−14

2）サ・ハ行子音の交替

「シ」と「ヒ」は語によって個別的に交替することがある。「それ」が「ホレ」,「そうです」が「ホーデス」などといった日常使用語の範囲で高い頻度で出現し県内では多く使用の確認ができる。今回の自然談話でも，多くの使用例が確認できた。

「そうだ」が「ホーダ」,「そんなん」が「ホンナン」,「そして」が「ホテ」と使用が男女差関係なく，確認することができた。

4．文法項目

1）接続助詞「ケンド」

「ケンド」は徳島の代表的な接続助詞であり，徳島県下，広い範囲で使用が認められている。小松島市においても，多用が認められた。これは接続助詞の方言の「ケン」「ケニ」の影響ともいわれている。

図2をみると，県全域にはケンド系の使用が拡がっていることがわかる。ケンド系は，四国において根強く使用が認められる形式である。今回の小松島調査でも,「ケンド」の使用を確認することができた。下記は使用例を記す。

○「イエヘン　ケンド。(言わない　けれども。)」

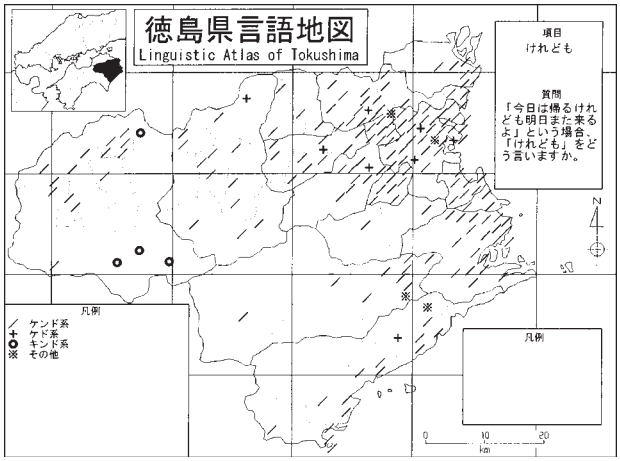

図2　仙波ほか（2002）「けれども」

2）文末詞「ジョ」「ジ」

徳島県下では，文末表現として,「ジェ」「ジョ」が用いられる。ジョは男性も使う。ほかに「ゼ」「ゾ」「デ」なども使われる。

今回の調査では,「ジョ」が認められた。次の**図3**は，断定の助動詞「雨だ」の部分をどう言いますかと質問した結果である。雨ジェに注目すると，鳴門市岡崎，小松島市，阿南市，鷲敷町中山に分布があることがわかる。今回の結果からも，小松島市で使用の確認ができたことから，今もなお使用が認められることがわかった。

今回小松島調査で，聞けた使用例は，下記である。

○「忘れてしもとんじょ。(忘れてしまったのよ。)」

○「怖かったじょ。(怖かったのよ。)」

なお，坂野あたりでは「ジ」を使うが，立江では「ジョ」「ジャ」と言う。

○ホージ（そうだ）　○ホンマジ（本当だ）

○ホンマジョ。ホンマジャ。(立江)

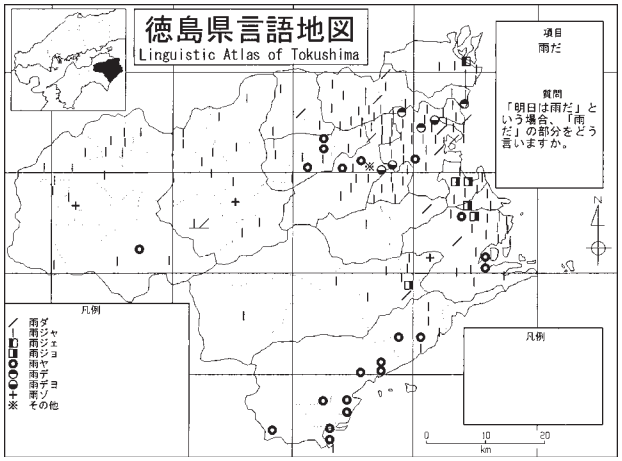

図3　仙波ほか（2002）「雨だ」

3）打ち消し過去「～ヘンダ」

「～ヘナンダ」ではなく「～ヘンダ」の形が談話の中で確認された。(和田島)

○食べれへんだわよ（食べられなかったのよ）

この形は，仙波ほか（2002）の「行くことができなかった」の地図でイケヘンダが佐那河内の1か所だけで記録されている。

4）「～ヨル」―アスペクト表現

○（キューリが）ナリヨル

○ハマ　イッキョッタ（浜へ行っていた）

○（喧嘩が）デキヨッタ（起こっていた）

これらは普通に現れる形であるが，次のような発話もあった。この例はたまたま，このときだけ現れた形かもしれない。(和田島)

○トーヨルトキニ（通っているときに）

5）比況の「ヨーナ」

「～ノヨーナ」ではなく「～ヨーナ」となる。

○オバケヨーナン（お化けのようなの）

○ゴテンヨーナ　イエ（御殿のような家）

5．語彙

以下では，小松島調査時に採集できた語及び語句について，述べておく。中にはシグレやマゼのように共通語と見るべきものも含まれるが，調査にご協力くださった方々が，方言と意識して口にのぼせたものとして，あえてここに取り上げることとした。また，見出しの前に＊を付けた語は仙波が出演した四国放送テレビとラジオに寄せられた情報によるものである。

いっころさ…一度に平げる。片づける。（あまりに美味しいので）イッコロサニ　タベル（お祖母さんが言っていたと。）『羽ノ浦町誌』以外の資料に見られない。

いっこん…一つ。一個。下郡および祖谷地方で使われる。

＊いなりに…いきなり。急に。「いなりに来たって，何もお土産ないでえ」（和田島）。「いなりに」がこの意味で使われるのは阿南市以南のようである。『小松島市史　風土記』では，「そのまま，何もせず。」となっている。こちらが古くからの意味で，『散木奇歌集』〔1128頃〕に初出例がある。「居なり」が語源。「急に」の意味は「いきなり」に引かれて生じたものかもしれない。『日本国語大辞典』『日本方言大辞典』にこの意味は書かれていない。

いりうりさん…煮干しの行商（和田島）。

＊いんじょ…言条。言う事。いんじょが分からん（言っている事が分からない）。

おおびたく…大火焚く。焚火をする。県内方言資料に見えず。『日本国語大辞典』では佐渡の方言に「一度にたき火を燃やすこと。強火。」とする。文献資料では「大火事」の意味。

おっさん…僧侶（和田島）。県内では竹ヶ島で使われる（「海陽町竹ヶ島の方言」『阿波学会紀要　第63号』）。近県では和歌山で。「和尚さん」からの変化と言われる。

おとみ・おとめ…貰い物の容器や風呂敷を返すとき，そこに入れる形ばかりのお返し。『羽ノ浦町誌』には「マッチ棒数本」とする。その他，半紙数枚ということもあった。オトミの方が広く分布する。

かく…舁く。二人以上で物を担ぐ。「籠を舁く」を除けば，中部・北陸以北および九州では使われない。「神輿を舁く。」

かさ…たくさん。非常に。「カサ　アツイ」（非常に暑い）。立江近辺で農家の人が使うのを聞くらしい。『小松島市史　風土記』は「たくさん」の意味だけ示す。

かにかまれる…蚊に刺される。ササレル・クワレルが若年層・高齢層ともに全国に分布し，カマレルは西日本に広く分布する。また，スワレルが富山，和歌山，徳島の高年層だけに見られる。（篠崎1997）なお，仙波は，「スワレルとしか言わない」と回答した小松島出身者を知っている。

けんとがわるい…「けんと」は『小松島市史　風土記』によると「①外聞。見栄　②当て推量，見込み」。県内方言ではこの二つの意味を上げるのが普通。なお，『日本方言大辞典』によると，①は「見体」，②は「見当」に由来し，①と②は別語である。「けんとが悪い」は「外聞が悪い」の意。

コークスをわかす…コークスは，石炭を高熱で蒸焼きして得られる火力の強い燃料であるが，それを使い，お湯を沸かすことを言う。「コークスでお湯を沸かす」と言うのが自然だろうが，「コークスを沸かす」と言うらしい。

＊ごそっこ…ごそ。藪。草や灌木の茂み。「ゴソッコに看板立てても分かるか！」（和田島）。うわて・灘地域の方言。

こち…東風。海岸地方に分布する。また雅語として小型国語辞典にも（もれなく）採用されている。

こっさえる…拵える。恐らくコシラエルがコサエルになり，語頭の音節のあとに促音を入れコッサエルが産まれたものであろう。県下でもっとも一般的な語形は，コッシャエルであり，コッサエルは徳島市，羽ノ浦，那賀奥などに分布し，コサエルは徳島市，名西郡の一部，旧海南町などに使われていたようだ。なお，『小松島市史　風土記』にコッサエルはない。

しかのあくにち…四箇の悪日。三月の節句の翌日。

しぐれ…時雨。にわか雨。晴れているのに急に降ってくる雨。11月頃に多い（立江）。県内の方言集に，これを見出しとするものはない。「時雨」の方言形としてはソバエが多い。なお，『小松島市史　風土記』には両方とも見られない。『羽ノ浦町誌』には気象用語のソバエを「台風の余波の通り雨」とする。

じまぜ…西風。元根井，和田島では南西風。ニシマゼとも。（黒川2001）

じーまーる…台風が過ぎ去る。「ジーマーッタノー。」

しゃてー…舎弟。弟（和田島）。県内資料では『阿波の国言葉』だけに出ている。『日本方言大辞典』には徳島県が挙がっていないのは同書が資料として用いた『阿波の言葉』（昭和５年）には，シャテイがなかったことを意味する。県内では珍しい語であることが推測できる。

そーとめはん…早乙女（和田島）。歴史的仮名遣いでは「さをとめ」であり古代の語形は［sawotome］であったが，ワ行音の衰退とともに［saotome］になり，この中の連母音［ao］が長音化したもの。島根方言のようにサートメへの変化も有り得たが，徳島方言ではソートメが残った。

たーつ…二つ。（和田島）フターツの頭音脱落。フタツをフターツと長音化するのも徳島方言（瀬戸内でも報告されているが）の特色。

たちる…立つ。タチルが普通の言い方（立江）。『小松島市史　風土記』ではタテルも示す。

たてる…戸，障子などを閉める。県内一般に通用。なお，『日本方言大辞典』には，この意味は出ていない。『日本国語大辞典』には，万葉集以降の文献例のみを示している。そして『三省堂国語辞典』他の小型国語辞典や中型国語辞典には「戸，障子を閉める」の意味が示されている。要するに，この語は標準語と見るべきであるが，忘れられつつあると言えるのかも知れない。

つっつぉ…たまった疲労。「ツッツォガ　デテキタ」

つまえる…片づける，整頓すること。県下全域で使われる。『日本方言大辞典』によると，この意味のツマエルは，淡路島・徳島県・香川県・高知県に分布する。「洗濯つまえといて。（洗濯物（を）片づけて）」

できる…物事が生じる。発生する。起こる。（祭りのときに）「ヨー　ケンカガ　デキヨッタラシイ（よく喧嘩が起こったらしい）」（和田島）

どびっちゃり…しょうたれ。だらしない，のろま。各種方言資料に未見。（和田島）

どんぶか…海の急に深くなったところ。牟岐でも。小豆島ではドンブカリ。他には見つからず。

なぐる…薙ぐる。（柄の長い「なぐり鎌」や草刈り機などで）なぎ倒すように草を刈ること。また，草を抜くこと。（参照：「三好市の方言」『阿波学会紀要第62号』）草より大きいものの場合は，カルを使用するという。

のうはんやすみ…農繁休み。昭和30年代まで，農村地帯の学校で農繁期に児童生徒が家業を手伝うために設定されていた休暇制度のこと。かつては，約５日間から10日間ほどの休みがあったとのことである。

はかとち…墓地（和田島）。県内方言資料に見えず。

はんげ…半夏。この日までに田植えを終え農作業を休む。半夏餅を作る。

ふご…畚。収穫物を運ぶための藁で作った袋。自然な発話の中では，フゴーと聞こえる場合がある。

べーがでる…へこたれて疲れた様子，「暑ーてしんどーてべーが出るわ。（暑くて疲れてへこたれてしまうよ。）」。「べー」は舌（べーロ）であろう。

ほんぜっく…節句の当日。他の資料には見られず。

まいまい…舞舞。忙しく動きまわること。てんてこまい。大慌てのことを指す。「テツダイシテ　マイマイシタ（手伝いをして，大慌てした。）」

まけまけ…容器から溢れそうな状態。マケマケ　イレル（和田島）　マケマケ　イッパイ（立江）『小松島市史　風土記』ではマケルの下位見出しになっている。『日本方言大辞典』では徳島県海部郡と香川県大川郡の文献が挙がっている。県内の方言資料では，『阿波の国言葉』の他，半田・木屋平・脇町・鳴門・上勝・勝浦・小松島・鷲敷・相生・上那賀・木頭・木沢・牟岐の資料に出ている。

まぜ…真風。南風を指す。全国の海岸部でみられる言い方である。

みってくる…汐が満ちてくる（和田島）。

むきつけ…面と向かって，直接に言うさま。「ムキツケに言う」県内方言資料には見えないが，和歌山県

和歌山市・海草郡にはある。

むらじゅうとめ…自分が住む地域にいる既婚女性。県内方言資料に見つからず。

めちょろ…目が見えにくくなったこと（立江）。「宝田村誌」に「メチヨロ　とろい」とある。他の資料になし。

もんび…紋日。「ものび（物日）」の変化した語。祝日・祭日など行事のある日のこと。『阿波の国言葉』には「花柳界ノ語」とある。県下各地に分布する。

やみかご…（行商などをするときの，自転車に積んで使う竹で編んだ籠）和田島。『阿波半田の方言』に「四角い籠」。日本国語大辞典，日本方言大辞典になし。

よいぜっく…節句の前夜。『日本国語大辞典』に「三月三日の雛祭，五月五日の節供の前夜。」とあり，文献例として「諸国風俗問状答　阿波国風俗問状答」から「宵節句より，軒端に菖蒲・蓬を葺，家々菖蒲湯をいたし申候」を引く。また沢村貞子の「私の浅草」からも用例を引いている。なお，県内方言資料には見えない。

6．立江はタッチェ

1）「タッチェ」が，一つの特徴であるわけ

地名が放送等，公的な場面で読まれる場合と，地元で日常的に口にする場合で語形が異なることがある。たとえば，次のような例を挙げることができる。

立江（タツエ／タッチェ），口山（クチヤマ／クッチャマ），（大阪の）松屋町（マツヤマチ／マッチャマチ）

一般語彙でも類例はある。

先山（サキヤマ／サッキャマ）。『小松島市史　風土記』と『羽ノ浦町誌』ではサッキャマだが，あとの方言集ではサキヤマなっている。

「立江」については一旦置くとして，他の語の音節（正確には「拍」を用いるべきかもしれない）の並び方を見ると，カ行，タ行の音節の後にヤ行の音節が続く場合に，カ行，タ行の前に促音（ッ）を挟んで次の２音節が拗音に変化していることが分かる。

つまり，チヤ→チャ，キヨ→キョ，ツヤ→チャと変化しているわけである。「立江（タツエ）」の場合には，ツの後にア行のエが続いているように見えるが，10世紀半ば以降，19世紀前半くらいまでの日本語ではア行のエ［e］の音節は存在せず，ヤ行のイェ［je］に発音されていた。16世紀末のキリシタン史料に見られるローマ字綴りでは，yeda（枝），yen（縁），iriye（入江）の様になっている。また，幕末期のローマ字綴りではYedo（江戸），Yen（円）になっていることでも分かる。実際の発音では，明治中期に「エ」がア行に発音されるようになっていた一方，方言ではヤ行のイェの発音が残っていたと考えられる事実があるが，煩雑を避けるため，ここでは省略する。

「立江」に話を戻す。『徳島県地名大辞典』（角川書店）によると「立江」は鎌倉期から存在したことが認められるようである。とすれば「立江」はタツイェ（［tatsuje］または［tatuje］）と発音されていたはずで「立江」の「江」はヤ行であったことになる。なお，この発音がいつまで残っていたかは分からない。

上に挙げた例のほか，一宇（イッチュウ）についても説明しておきたい。この場合は母音（あるいはワ行）のウがタ行のチに続いていることになるが，ア行のウもワ行のウも同じ発音であり，ワ行の子音も，その発音はほぼ同じであり，ワ行の子音はヤ行の子音と同じく，「半母音」と呼ばれることがある。

このように無声子音を持つ音節（カ行・サ行・タ行）に半母音を子音に持つヤ行やワ行が続く場合，促音が挿入されて後続音節が拗音になる例は，徳島方言の場合，珍しくはない。

また，重清（シゲキヨ／シゲッキョ）のように有声子音を持つ音節（濁音音節）が先立つ例もある。

2）タッチェが特別なのはチェが現れるからである。

日本語でチェが現れるのは外来語を別にすれば，舌打ちのチェッとかチェストーのようなオノマトペ（擬音語・擬態語）に限られる。この音は，国語教科書やこくごノートに掲載されている音節表（五十音図）には現れない。拗音の表は次のようになっている。

きゃ　きゅ　きょ
しゃ　しゅ　しょ
ちゃ　ちゅ　ちょ
にゃ　にゅ　にょ
みゃ　みゅ　みょ

りゃ　りゅ　りょ

つまり，「正しい」日本語の音節リストに「チェ」の音は含まれない。なお，西日本一帯で，サ行の「せ」が「シェ」と発音されてきたわけだが，これはあくまでもサ行のエ段の発音であり，「シャ行」の音ではない。「天才バカボン」でイヤミ氏が発する「シェーッ」はオノマトペとして存在が許されているのであって，一般語彙ではない。

「タッチェ」が特別なのは，五十音の表に含まれない「チェ」があるからなのである。

【補足】方言に「イェ」の撥音が残っていたと解釈できることについて

「江戸／穢土」を「YEDO ／ Yedo」や「円／縁」を「YEN ／ Yen」とローマ字表記されているのは，発音の通りとも，また古い時代の表記を残しているにすぎないとも解釈できるため，実は，「イェ」という発音の確実な証拠とすることには慎重で無ければならない。

ヘボンの『和英語林集成』を見ると，初版（1867年刊）では「え」で始まる語の綴りは「YE」で始まっているが，第三版（1886年刊）では，「円」と助詞「へ」を除いて，「E」で始められている。この，ほぼ20年の間に，「え」の発音が［ye］から［e］に変わったとするのは早計であろう。

それはさておき，以下には「イェ」の発音が残っていたことの確かな証拠と言える事実を二つあげておきたい。

かつて毎日放送ラジオで放送されていた『それゆけ金曜!! 板東英二』（1985～1995）の「おばあちゃんと話そう」に多家良町出身の女性が登場したことがあったのだが，彼女が返事の「ええ」にあたるところで，何回か必ず「イェー」と言っていた。それを聞いたスタジオ内の出演者は，「モダンなおばあちゃんやねえ！」と反応したのだった。板東英二他の人たちは「イェー」を英語の「yea＝イェイ」と受け取ったようだったが，おばあちゃんの「イェー」は標準語の「ええ」だったのだ。

高島俊男の『お言葉ですが…⑦漢字語源の筋ちがい』（文春文庫）に『「イェイゴ」の話』という文章がある（初出は，週刊文春2002年１月17日号）。

そこでは，「いまからちょうど五十年前」のこととして沖縄出身の美術の先生が「英語のことを「イェイゴ」とおっしゃった」と書いてある。

なお，これが印象に残ったということは，高島氏の出身地である相生では「イェ」の発音はほとんど残っていなかったということであろう。

７．おわりに

今回の調査では，思いもかけず多くの方からご教示をいただくことができた。ご協力いただいた方々のお名前も伺えなかったほどであった。以下に，お名前を記録できた方々を記し（順不同），ここにお名前を挙げることのできなかった方々も含めて感謝申し上げる。

阿部惠美子，半田扶美子，森艶子，里村真澄，細川清子，小原キミ子，倉崎勝，新居タケ子，新谷凱，敷島知恵子，高田美紀子

【参考文献】

上野和昭編（1997）：『日本のことばシリーズ36　徳島県のことば』 明治書院

加藤信昭（1982）：「阿波の方言」『徳島の研究』第６巻　清文堂出版

「角川日本地名大辞典」編集委員会（1986）：『角川日本地名大辞典　36　徳島県』角川書店

金沢治（1961）：『阿波言葉の語法』徳島市中央公民館付属図書館

金沢治（1976）：『阿波言葉の辞典』小山助学館

黒川貴史（2001）：「徳島県の漁港における風向語彙の使用状況と地域差」（徳島大学総合科学部人間社会学科日本・東洋地域研究コース卒業論文）

国立国語研究所編（1967）：『日本言語地図』大蔵省印刷局

篠崎晃一（1997）：「気づかない方言７」『日本語学』1997年10月号

小学館国語辞典編集部（2000）：『日本国語大辞典　第二版』小学館

仙波光明・岸江信介・石田祐子編（2002）：『徳島県言語地図』徳島大学国語学研究室

土居重俊（1997）：「四国の方言」『四国方言考①（四国一般・徳島県・高知県』ゆまに書房

橋本亀一（1939）：『阿波の國言葉』国書刊行会

森重幸（1962）：「分布図からみた徳島県の方言」阿波学会報告会資料

森重幸（1982）：「徳島県の方言」『講座方言学11　中国四国地方の方言』図書刊行会

【参照した文献】

「小松島市の方言」の語彙について検討する際に利用した県内資料の方言辞典，方言集は以下の通りである。各項目の最初

は，ファイルの名前であり，メモに示された資料名はほぼこれに依っている。

方言辞典類

阿波の国言葉：橋本龜一編「阿波の国言葉」国書刊行会　1975　全国方言資料集成　（原本は，1939刊）

阿波方言集（森本安市）：森本安市著「阿波方言集」森住博榮堂書店　1950　阿波民俗叢書第三輯

たのしい阿波の方言：森本安市著「たのしい阿波の方言」南海ブックス　1979　阿波文庫 7

改訂阿波言葉の辞典：金沢治著「改訂　阿波言葉の辞典」小山助学館　1976

徳島の方言：高田豊輝著「徳島の方言」高田豊輝　1985

三好郡の方言集

三名村史：田村正編「三名村史」山城町役場　1968

ひがしいやの民俗：東祖谷山村　故事収集委員会ほか編「ひがしいやの民俗」東祖谷山村教育委員会　1990

池田町誌：池田町誌編集委員会編「池田町誌」池田町　1962

井川町誌：西井治夫編「井川町誌」井川町役場　1982

井川町史2006：岡本福治ほか「井川町史」井川町役場　2006（『阿波学会紀要第44号』所収　「井川町の方言」（徳島県方言学会）参考）

三加茂町史：三加茂町史編集委員会編「三加茂町史」三加茂町　2006

山城の方言：山城町　社会　福祉　協議会編「ふるさとの故事　総集編―老人生きがい対策事業老人会三十周年記念―」山城町老人クラブ連合会　1989

美馬郡の方言集

半田町誌：半田町誌出版委員会編「半田町誌 下巻」半田町誌出版委員会事務局　1981

阿波学会半田：「総合学術調査報告　半田町　郷土研究発表会紀要38号」1992

阿波半田の方言：半田町方言保存会「阿波半田の方言」半田町方言保存会　2005

一宇村誌：一宇村史編纂委員会編「一宇村史」一宇村　1972

木屋平村史：三木寛人編「木屋平村史」麻植郡木屋平村役場　1971

改訂木屋平村史：木屋平村史編集委員会編「木屋平村史」木屋平村　1996

岩倉村風土記：荒岡一夫編「岩倉村風土記」岩倉校　1939

古宮村誌：三木近太郎著「古宮村誌（稿本）」古宮村郷土研究会　1954

江原町郷土史：「江原町郷土史」江原北尋常高等小学校職員室　1933

息吹く端山：上柿源内「息吹く端山」上柿源内　1996

貞光町の方言：上柿源内・松浦義人「阿波貞光町の息吹」上柿源内　2001

半田町誌：半田町誌出版委員会編「半田町誌 下巻」半田町誌出版委員会事務局　1981

美馬郡木屋平村の方言：インターネット（現在は削除されている模様）

脇町の方言と語詞：國見慶英著「脇町の方言と語詞」國見慶英　1999

阿波郡の方言集

阿波町史：阿波町史編纂委員会編「阿波町史」阿波町　1979

市場町史 大典記念：近藤有地蔵編 市場町役場 1916

市場町史 町政40周年記念出版：市場町史編纂委員会編 市場町　1996

板野郡の方言集

藍住町史：藍住町史編集委員会編「藍住町史」藍住町　1965

とらじろう（藍園村）方言談義：「〈阿波方言〉―故郷を 離れて気づく 国訛り―」『とらじろうのおもろな～』http:www.geocities.jpjakoba03yatora10hougenn.html

とらじろう氏は，藍園村出身。昭和13年生まれ。現在三重県在住。

麻植郡の方言集

麻植郡誌：麻植郡教育会編「麻植郡誌」麻植郡教育会　1922

改訂山川町史：改訂山川町史刊行会「改訂山川町史」改訂山川町史刊行会　1987

山川町史：山川町史編集委員会編「山川町史」改訂山川町史刊行会　1987

鴨島読本：鴨島町編「鴨島読本」鴨島町　（体裁から昭和10年前後に刊行されたものと思われる）

名西郡の方言集

神山の方言：神山町成人大学編集部編「神山の方言と言い伝え」神山町教育委員会　1990

上分村誌：上分上山村誌編集委員会編「上分上山村誌」上分上山村誌編集委員会　1978

神領村誌：神領村誌編集委員会編「神領村誌」神領村誌編集委員会　1960

鬼籠野村誌：鬼籠野村誌編集委員会編「鬼籠野村誌」徳島県教育印刷　1995

名東郡の方言集

ふるさと佐那河内：ふるさと佐那河内編集委員会編「ふるさと佐那河内―民俗と民話―」佐那河内村　1992

鳴門市の方言集

鳴門の方言：増田明著「鳴門の方言」増田明　1989

高島の方言（金沢）：金沢治「高島の方言」第四回郷土研究発表会紀要　鳴門塩業地帯総合調査報告　1958

鳴門市川東：2016年，川東公民館での調査時に提供されたリスト

徳島市の方言集

大正期徳島市の方言：仁木堯著「大正期徳島市の方言」仁木堯

1989

大正期徳島市の方言補遺：仁木堯著「昭和末期旧徳島市の方言」仁木堯　1990

昭和末期旧徳島市の方言：仁木堯著「昭和末期旧徳島市の方言」仁木堯　1990

徳島市史93：徳島市史編さん室「徳島市史　第四巻」徳島市教育委員会　1993

勝浦郡の方言集

かみかつ方言辞典：重兵衛「かみかつ方言辞典」平成12年11月28日改訂　（かつて上勝町役場のホームページに掲載されていたもの。現在は削除されている。）

上勝町誌：徳島県勝浦郡上勝町誌編纂委員会「上勝町誌」上勝町誌編纂委員会　1979. 12

阿波訛り（喜田貞吉著作集）：喜田貞吉「喜田貞吉著作集　第一四巻　六十年の回顧・日誌」平凡社　1982

那賀郡の方言集（阿南市を含む）

阿南・西方村誌：西方村誌編集委員会編「西方村誌」西方村誌編集委員会　1983

阿波希ん奴：島田泉山「阿波希ん奴」（草稿）明治34年以降に成立か。

仙波光明「徳島大学方言研究会報告４　資料紹介　『阿波希ん奴』」徳島大学国語国文学　第８号　徳島大学国語国文学会　1995

羽ノ浦町誌：羽ノ浦町誌編さん委員会編「羽ノ浦町誌 民俗編」羽ノ浦　1995

宝田村誌：井筒茂編「宝田村誌略（草稿）言語編」（徳島県立図書館所蔵）

鷲敷のふるさとことば　方言集　改訂版：福富次郎著「鷲敷のふるさとことば　方言集」福富次郎　2004

鷲敷町誌：鷲敷町役場編「鷲敷町史」鷲敷町役場　1940

相生町誌：相生町誌編纂委員会編「相生町誌」相生町　1973

上那賀町誌：上那賀町誌編さん委員会編「上那賀町誌」上那賀町　1982

相生町の方言語彙（金沢）：「那賀郡相生町の方言」総合学術調査報告　相生町　阿波学会紀要第47号　2001

木沢村誌：木沢村誌編纂委員会編「木沢村誌」木沢村誌編纂委員会　1976

木頭地方々言語集：井上一男「木頭地方々言語集」（『郷土阿波』14号　通巻14）1937

海部郡の方言集

赤河内村郷土誌：笠井藍水編　日和佐町公民館　1959

悦田喜和雄方言辞典：江津敬「土の言葉――悦田喜和雄方言辞典――」『徳島県立文学館・書道美術館（仮称）開設準備研究紀要水脈　第２号』徳島県環境生活部生活文化国際総室　2001

海南町史下巻：海南町史編さん委員会編「海南町史 下巻」徳島県海部郡海南町　1995

海部郡出羽島の方言：川島信夫「海部郡出羽島の方言」『郷土研究発表会紀要　第13号』徳島県立図書館　1967

消え去りゆく大里言葉：土壁重信著「消え去りゆく大里言葉」土壁重信　1976

ひわさ　方言とことわざ：ひわさ方言とことわざ編集委員編「ひわさ　方言とことわざ」日和佐町老人クラブ連合会　1987

牟岐のことば　地名　道：谷典博著　牟岐町教育委員会発行　2003

牟岐の方言（役場版）：かつて牟岐町役場のホームページで公開されていたもの（現在公開されているものとは異なる）

牟岐町の方言：川島信夫・森重幸　郷土研究発表会紀要第23号　1977

Dialect of Komatsushima City, Tokushima, Japan

SENBA Mitsuaki*, KISHIE Shinsuke and SAKOGUCHI Yukako
* 109-14 Okuno Wada, Aizumi-cho, Itano-gun, Tokushima 771-1202, JAPAN

Proceedings of Awagakkai, No. 64 (2023), pp. 91 − 98.